

『淨土論註』の研究

——特に五念門を中心として——

延 塚 知 道

親鸞の『教行信証』の重要な部分のほとんどが、世親の『淨土論』と曇鸞の『淨土論註』とによってつくされている。親鸞という名のりが、世親と曇鸞の一字づつを取って名のられたという光学による指摘も、その辺に充分の理由があるところである。したがって、『教行信証』の大乗の仏道としての意義を尋ねたく、『論註』の研究に取組んでいる事である。

さてここでは、『大無量壽經』の実踐行として『淨土論』に説かれている五念門の行（礼拝・讀嘆・作願・觀察・回向）を、曇鸞が『淨土論註』でどのように了解しているかを尋ねたい。というのは、世親は『大經』に説かれる願生淨土の仏道を、瑜珈唯識の立場から、大乗の菩薩道として明らかにする課題を持っている。したがって先の五念門の行も奢摩他・毗婆舍那（作願・觀察）といふ、無漏の智慧による止觀行を中心に見据えている。更にはこの五念門の行に大乘菩薩道の課題である自利々他が果し遂げられていく事を説くのである。

しかし曇鸞は、願生淨土の仏道を、世親と同じように大乗の菩薩道として表わす関心はない。五濁の世、無仏の時を生きる煩惱具足の凡夫という徹底した曇鸞の自覺を基底として、そこに開かれた仏道、即ち、信仏の因縁によって凡夫のままで仏に成る無上仏道として明らかにするのである。したがって『淨土論』の註解

を通しながら、しかも曇鸞の『論註』においては、その仏道を明らかにしようとする意図と課題とが、世親とは決定的に違うことに充分の注意をしなければならない。そこでは大乗菩薩道→無上仏道へという展開に共なって、その仏道の課題が、不退転→正定聚と展開をしており、その仏道を歩く主体が、当然のことながら、菩薩→一切外道凡夫人へと展開している。更に、ここで問題にしようとしている五念門の行が、大乗の菩薩行→仏の本願に基礎を持つ凡夫の往生行へと展開をしているのである。

実は、親鸞の『教行信証』は、このような曇鸞の仏道觀を、ほぼそのまま継承し更に徹底して、淨土真宗という仏道が本願の仏道である事を明らかにしたものである。したがって、曇鸞の五念門の了解を尋ねる事によって、親鸞の念佛の意義を窺いたい。

曇鸞は『願生偈』が『大經』の優婆提舍であることを明らかにする為に、「世尊我一心」以下の偈の全体に五念門を配当する。それは『願生偈』の全体が『大經』の真実に触れた世親の感動を表わすものであり、偈を説く事が、『大經』の真実を行じ（五念門）証しする、仏教相応の仏事であることを明らかにする為である。更には、

我一心とは、天親菩薩自督の詞なり。言うところは、無碍光明來を念じたてまつりて、安樂に生ぜんと願うこと、心々相続して他の想間雜すること無きとなり

と説いて、淨土を願生する五念門の全体が、我一心という願生心の自然の展開相であることを明らかにしたのである。この曇鸞の五念配釈という仕事によって、大乗菩薩行としての難修な五念門をどう行じるのかにあるのではなく、凡夫の課題がどこまでも願生心の発起にあることが見定められたのである。

世親は、五念門行を大乗菩薩行として説く為に、その中心を観察門の見仏に置き、そこに願生心の根拠を見ていた。しかし曇鸞は、願生心の発起を讀嘆門に見定めている。そこでは、「彼の無碍光如來の名号は、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう」と、衆生が名号に帰す回心の出来事を破闇満願と説き、徹底した懺悔をせしめて発起した我一心に、衆生の根本志願が満たされていくことを説くのである。

曇鸞は五念配釈によつて、凡夫の課題が我一心の発起にあり、五念門の中心が讀嘆門であることを明確にした。しかし、後の作願・觀察・回向が、無漏の智慧による止觀行と、それによつて果される作心を超えた利他行として説かれる限り、それをどう了解するかに苦労をしている。同時に、世親が、我一心の根拠を浄土における見仏に見定めていた事を、どう了解すべきであろうか。この課題の為に曇鸞は、後の三念門に、彼此二土にわたる註釈をする。まず作願門では、

一には、一心に専ら阿弥陀如來を念じて彼の土に生まれんと願すれば、此の如きの名号、及び彼の国土の名号、能く一切の惡を止む。(此土) 二には、彼の安樂土は三界の道に過ぎたり。若し人、亦彼の國に生じねれば、自然に身口意の惡を止む。(彼土) 三には、阿弥陀如來正覺住持の力を以て、自然に声聞辟支仏を求むる心を止む。(彼土) この三種の止は、如來如実の功德より生ず。

次の觀察門では、

一には、此に在りて想をなして、彼の三種の莊嚴功德を觀ずれば、此の功德如実なるが故に、修行すれば亦如実の功德を得。如実の功德とは、決定して彼の土に生を得るなり。(此

土) 一には、亦彼の淨土に生を得れば、即ち阿弥陀仏を見たてまつる。未証淨心の菩薩、畢竟して平等法身を得証す。淨心の菩薩と上地の菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得。(彼土)

最後の回向門では、

往相とは、已れが功徳を以て一切衆生に廻施して、作願して共に彼の阿弥陀如來の安樂淨土に往生せしめんとなり。(此土) 還相とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毗婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向えしむるなり。(彼土)

この三つの引文の此土の行は、願生者の行と考えるべきであり、彼土の行は、淨土の菩薩の菩薩行を見るべきである。したがつて、少なくとも此土の行として説かれる箇所は、曇鸞にとっては、五濁無仏の時を生きる煩惱成就の凡夫の行でなくてはならない。

しかしそく読めば、作願・觀察の此土の行は、願生者の向上的な自力行ではなく、自力無功の懺悔を契機として讀嘆門で帰した名号の働き(如來如実の功德)として説かれている。また回向門の「作願して共に彼の安樂淨土に往生せしめん」という此土の行は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如來 願生安樂國」と、世親が帰敬偈で表白する作願門の態度と別にあるものではない。なぜなら、淨土へ願生する我は、「普ねく諸の衆生と共に」と言うことができる流布の我であるからである。

このように、作願・觀察・回向の此土の行は、どれも、讀嘆門で凡夫が帰すこととなつた名号の働きに帰してしまう。曇鸞は、煩惱具足の凡夫という徹底した懺悔を通して、凡夫の五念門は、全て讀嘆門の称名念佛に帰結するものと説くのである。したがつ

て、後の三念門は、衆生が名号に帰した心、即ち願生心に自然に備わる意義として説かれるのであり、それが願生者にとって修し難い行と説かれるのは、衆生の自力の行ではなく、「如來選択の願心より發起する」、願生心の超越的な意味を明らかにせんが為である。

また、この此土の行と共に説かれる淨土の菩薩の行は、願生心の根拠である如來選択の願心の世界を開示したものであるが故に、凡夫にとっては超越的な彼土の行として説かざるを得なかつたに違ひない。したがつて願生心の此土における意義である作願・觀察・回向は、必ず淨土の菩薩の奢摩他・毗婆舍那と還相回向へと究竟していくと見るべきであろう。

周知のように親鸞は、卷末の他利利他的深義、覈求其本釈等々から『論註』の全体を読み返し、五念門の彼土における淨土の菩薩行を、法藏菩薩の行と読んだ。したがつて、帰命願生するわれわれの徒因向果の仏道の背景に、衆生の自我関心を破つて名号から開かれた仏道、即ち「菩薩智慧清浄の業より起りて、仏事を莊嚴する」從果向因の法藏菩薩の永劫の修行を探り当てたのである。したがつて、淨土の菩薩の行の功徳を願生心として賜わればこそ、衆生が淨土を願生し得るのである。であれば、身は煩惱具足の凡夫であつても、その願生心には淨土の菩薩の行の意義を賜わって、仏の本願に遇つた者は仏願を背負つて立ちあがるという積極的な菩薩の意義がそこに生きられると読むべきである。

世親は、このような仏願を背負つて立ちあがつた宗教的主体を「世尊我一心、帰命(身)尽十方無碍光如來(口)願生安樂國(意)」と表白したに違ひない。私は、凡夫の五念門は、どこまでも如來の名を讚嘆する称名念佛に尽きると思うが、その称名念佛の意義は、世親のこの帰敬偈の身口意に表現されている礼拝・讚嘆・作願のこれだけの表白に撰まると思う。とすれば、世親が願生心の根拠である見仏を説いた觀察門は、衆生の回心を説く讚嘆門と見事に重なつて、衆生を念佛に帰せしめ淨土を願生する宗教的態度を生み出す根拠(智業)を示すものである。また、回向門は、法藏菩薩の還相回向を背景としているからこそ、「願生安樂國」という衆生の作願が、どこまでもこの娑婆を捨てずに、「普く諸の衆生と共に」(方便智業)と、言いうことを示すものと見るものである。

以上、曇鸞の五念門の了解から、まず思われる事は、淨土が、時間的並列的な彼土としてではなく、願生心に自証される国土として、娑婆と重層的に説かれる事である。更にそれと関連して、親鸞の念佛は単に凡夫の救済と言うにとどまらず、そこには淨土の菩薩の五念門の意義が生きられ「信に死して願に生きる」という大乗菩薩道の意義があることである。したがつて曇鸞のこの五念門の了解は、本願に帰すという親鸞の念佛の体験の中に、聖道淨土の相対を超えて、大乗の仏道の基本にまで直結していくような感動的な眼を親鸞に開く端緒となつたことが思われる。